

「恐れるよりもブチあたれ！」



ライオン会長 **濱 逸夫**
はま いつお

ライオンに入社して最初に配属されたのはプロセス開発研究所。研究室で組成開発された製品を工場設備で製造するためにスケールアップ検討を行い、生産現場に導入する仕事である。安定的かつ効率的な工場生産を可能とする設備仕様やプロセス条件をデザインするため、作業服と安全靴を履き、毎日ドラム缶で原料を運び、実験用パイロットプラントでの検討を繰り返していた。

入社後1年ほどが経ち、主担当として自ら設計した製品の工場試作に1人で立ち会うこととなった。今では考えられないが、当時は工場試作に失敗すると、プラントの上から石が飛んでくるとの噂がもともとらしく広まっていた。試作予定日が近づくとともに、不安がどんどん広がっていたが、そんな時に先輩研究員から言われた一言が、「恐れるよりもブチあたれ！」であった。

工場試作では当初思ったような結果が出ず、青ざめたことを今でも覚えているが、現場メンバーの知恵をもらって何とか目標とする試作品が完成した。当時は宅配便もなかったのので、試作品を石油缶に詰め、新幹線で東京まで持ち帰らねばならなかったが、工場長用の社用車を準備いただくなど、工場メンバーの最大限のサポートをもらい、社会人初の修羅場で大きな達成感を得ることができた。その後も様々な技術開発に挑戦し、多くのガッツポーズを繰り返した。工場現場は常に厳しいながらも、現場の声は神の声、世界初の技術

開発やイノベーションを生み出す大きな力となった。

「恐れるよりもブチあたれ！」。この言葉は海外においても貴重な経験の源泉となった。

アメリカ農務省の研究所で、ある先進的な技術が開発されたことを知り、出張のチャンスに何としても自分の目で見たいとの思いが募り、思い切って日本のアメリカ大使館に頼み込んで、研究所訪問が実現した。行ってみると研究所の全所長が集合している場に案内され、新技術の紹介をいただいたが、同時に全員の前で突然、自身の研究のプレゼンを依頼された。当時ライオンがアメリカから大量の石鹼原料を輸入するお客様であったことから、アメリカ大使館が「日本から素晴らしい研究者が行くので訪問を受けてほしい」と依頼したのが事の顛末であった。まさに冷や汗のプレゼンであったが、大きな自信に繋がる経験となった。

後年、研究を離れ、様々な仕事に関わることになるが、必死に動いていると、必ず誰か強力なサポーターが現れた。社長になり、まさにビルの屋上で嵐にさらされる状況であったが、また現場が最大のサポーターとなり、拙い経営者をバックアップしてくれた。会長となっても若い頃のガッツポーズが忘れられず、ますます好奇心や挑戦心に溢れている。「恐れるよりもブチあたれ！」。この言葉で励ましてくれた先輩を含め、これまで力をいただいた全てのサポーターに感謝申し上げます。